

■ 平城宮第一次大極殿院の幢旗遺構

宝幢・四神旗(幡)とは、鳥・日月・四神をモチーフにした7本の儀仗旗で、古代国家の最重要儀式である即位式や元日朝賀にのみ用いられました。鳥像幢(鳥形幢)・日像幢・月像幢・青龍旗(幡)・朱雀旗(幡)・白虎旗(幡)・玄武旗(幡)からなり、「延喜式」などの平安時代の史料や奈良時代後期の平城宮第二次大極殿院の発掘遺構では、主柱に2本の脇柱が付く三本柱式の宝幢・四神旗が大極殿の前で7本横一列に並びます。これらの定型化した宝幢・四神旗(幡)は、変容しながらも江戸時代末まで用いられました。

近年、宝幢・四神旗(幡)の成立と定型化の過程が、発掘調査の成果によりあきらかになってきました。2016年度の飛鳥藤原第189次調査では、大宝元年(701)元日朝賀にともなう藤原宮幢幡遺構を発見し、宝幢・四神旗(幡)の最初の姿が判明しました。藤原宮の宝幢・四神幡は、主柱のみの一本柱式である可能性が高く、中央に鳥形幢が、その東に日像、青龍幡、朱雀幡、西に月像、玄武幡、白虎幡がそれぞれ三角形状をなして、大極殿院南門の前に並びます。「文物の儀、是に備れり」と謳われるこの元日朝賀は、律令国家完成の宣言と一般に理解される古代史上の歴史的一場面です。



大宝元年(701)元日朝賀の復元(南から)
(復元した宝幢・四神幡を藤原宮大極殿院南門の前に配置。赤い柱が大極殿院南門の遺構表示、奥の森が大極殿。)

そして先頃、1970年度の平城宮第69次調査の成果を再検討した結果、長らく謎だった奈良時代前期の平城宮第一次大極殿院にともなう幢旗遺構を発見しました。第一次大極殿院の宝幢・四神旗は三本柱式で、中央に鳥像幢、その東に日像幢、朱雀旗、青龍旗が、西に月像幢、白虎旗、玄武旗が、大極殿の前面で横一列に並びます。三本柱式の宝幢・四神旗が7本横一列に大極殿の前に並ぶものへと変化したのは、奈良時代前期であると初めてわかりました。

これらの発掘調査の調査成果により、宝幢・四神旗(幡)は、大宝元年元日朝賀にともない藤原宮で成立したと考えられ、平城京遷都を経て、平城宮第一次大極殿院において奈良時代前期に定型化したことがあきらかになったのです。ただし、この定型化が平城遷都当初からなのか、それとももう少し時間が下るのか、より詳細な時期についてはまだ研究の余地を残しており、今後の検討課題です。

現在、新天皇陛下即位を記念して、第一次大極殿の復原建物のなかで、宝幢・四神旗(幡)の復元品を特別展示しています。今回は、藤原宮の幢幡遺構の配置を模して展示しました。ぜひ平城宮跡に足をお運びいただき、皆様に古代の即位式や元日朝賀について想いを馳せていただきたいと思います。

(都城発掘調査部 大澤 正吾)



奈良時代前期の元日朝賀・即位式の復元(南から)
(平城宮第一次大極殿の復原建物の前面に、復元した宝幢・四神旗の写真を合成。)



発掘調査の概要

藤原宮大極殿院東面回廊の調査（飛鳥藤原第200次調査）

都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）では、近年、藤原宮中枢部の様相をあきらかにするため、大極殿院の調査を継続的におこなっています。本年度は、東面回廊の詳細な構造と内庭部の様相解明を目的として、2019年4月22日より、大極殿の東側約1,180mを対象に発掘調査を実施しています。

大極殿院については、戦前に日本古文化研究所が調査をおこなっており、大極殿院の四辺が回廊で区画されていることなど、その主要な構造をあきらかにしています。その後、奈文研の調査によって、それらの回廊が3列の柱がならぶ複廊構造であること、桁行7間、梁行2間の東門が大極殿の東側に存在したことなどがわかつています。昨年度の調査では、東面回廊と北面回廊が接続する東北隅部の調査をおこない、東面回廊が複廊のまま北面回廊に接続することがあきらかになりました。しかし、東北隅部から東門にいたる範囲の回廊の詳細な構造については、検討の余地が残っています。今回は、東面回廊の柱配置や柱間寸法、東門と回廊の接続状況の解明など

を課題として、調査に取り組んでいます。

調査は春から実施し、現在は、史跡整備とともに盛土や、都が移った後に営まれた水田の床土を取り除いたところです。その過程で古文化研究所の調査区を確認しました。合計4基、2列分の根石が検出されており、その他にも根石を探したと思われる掘り込みが複数確認されました。また、床土の下には大量の瓦が堆積していました。東面回廊の基壇裾付近に特に集中することから、回廊に使用されていた瓦が投棄され、堆積したものと考えられます。現在は、藤原宮期の遺構の本格的な検出作業を進めており、徐々に回廊や基壇の様相があきらかになりつつあります。

いっぽう、1977年におこなわれた内庭部の調査では、大極殿の北方で東西掘立柱列が見つかっています。遮蔽施設と考えられていますが、その全容と性格ははっきりしていません。今回の調査区ではその東側の延長部分を検出しつつあります。また、昨年度の大極殿院北部の調査では、内庭に敷いた礫の上に再び礫を敷き直すという工程があきらかになりました。さらに、北面回廊をつくる際に掘られた排水溝も複数みつかっています。こうした内庭の整備状況や大極殿院の詳細な造営過程の解明にも取り組んでいきます。

今年は、奈文研が藤原宮第1次調査（朱雀門）を実施してから50年目にあたります。さらに、今回の調査は記念すべき飛鳥藤原第200次調査です。この調査にふさわしい成果を秋頃にはみなさまにお伝えできるように、夏の暑さにも耐え、鋭意調査を進めています。

（都城発掘調査部 道上祥武）



調査区全景（北東から）



東面回廊周辺に堆積する大量の瓦（北東から）

平城宮第一次大極殿院地区の調査（平城第612次）

奈良文化財研究所では、1959年以来、継続的に第一次大極殿院地区の発掘調査をおこなってきました。今回の調査は、国土交通省による第一次大極殿院の復原整備にともなうものです。

これまでの調査成果から、第一次大極殿院地区の遺構は、大きく3つの時期に分かれることがあきらかになっています。Ⅰ期は奈良時代前半（第一次大極殿院の時期）で、東西約180m、南北約320mの範囲を築地回廊で囲み、北に大極殿を建て、その南を礫敷の広場とします。現在、南門の復原工事が進められています。Ⅱ期は奈良時代後半（称徳天皇の西宮の時期）で、南北幅を狭めて内裏と同規模の区画（東西約180m、南北約190m）をつくり、区画内の北半分に多数の掘立柱建物を建てます。Ⅲ期は平安時代初頭（平城太上天皇の西宮の時期）で、Ⅱ期と同じ場所に区画施設をつくり、その内側に多数の掘立柱建物を建てます。また、区画の外側にさらに堀（外郭堀）をめぐらせます。

今回の調査地は、奈良時代には、第一次大極殿や西宮の東面を区画する施設の東側にあたり、平安時代初頭には、平城太上天皇の西宮の東外郭堀が想定される場所です。調査期間は2019年4月5日から



調査区全景（南東から）

8月2日まで、調査面積は400m²です。

調査の結果、平安時代初頭の南北堀1条と南北溝2条を、約23mにわたって検出しました。これまでの調査でも確認している遺構で、平城太上天皇の住まいの東辺を区画する堀と、それにともなう排水溝と考えられます。

南北堀は、調査区の西部で掘立柱の柱穴10基を検出しました。北と南はさらに調査区外へ続きます。柱穴の多くは、掘方が一辺約50cmの隅丸方形ないし円形をしています。柱間寸法は一定ではなく、1.9～2.7m(6.5～9尺)です。

これまでの調査成果から、この南北堀は全長約235mであること、今回の調査区北端から約110m北で推定大膳職地区の東を限る築地堀に取り付くこと、今回の調査区南端から約100m南で西に折れること等が判明しています。

南北溝は、南北堀の東西両側を堀に並行して流れる素掘りの溝で、いずれも幅約1m。深さは堀の東側の溝が約20cm、西側の溝が約35cmです。北と南はさらに調査区外へと続きます。

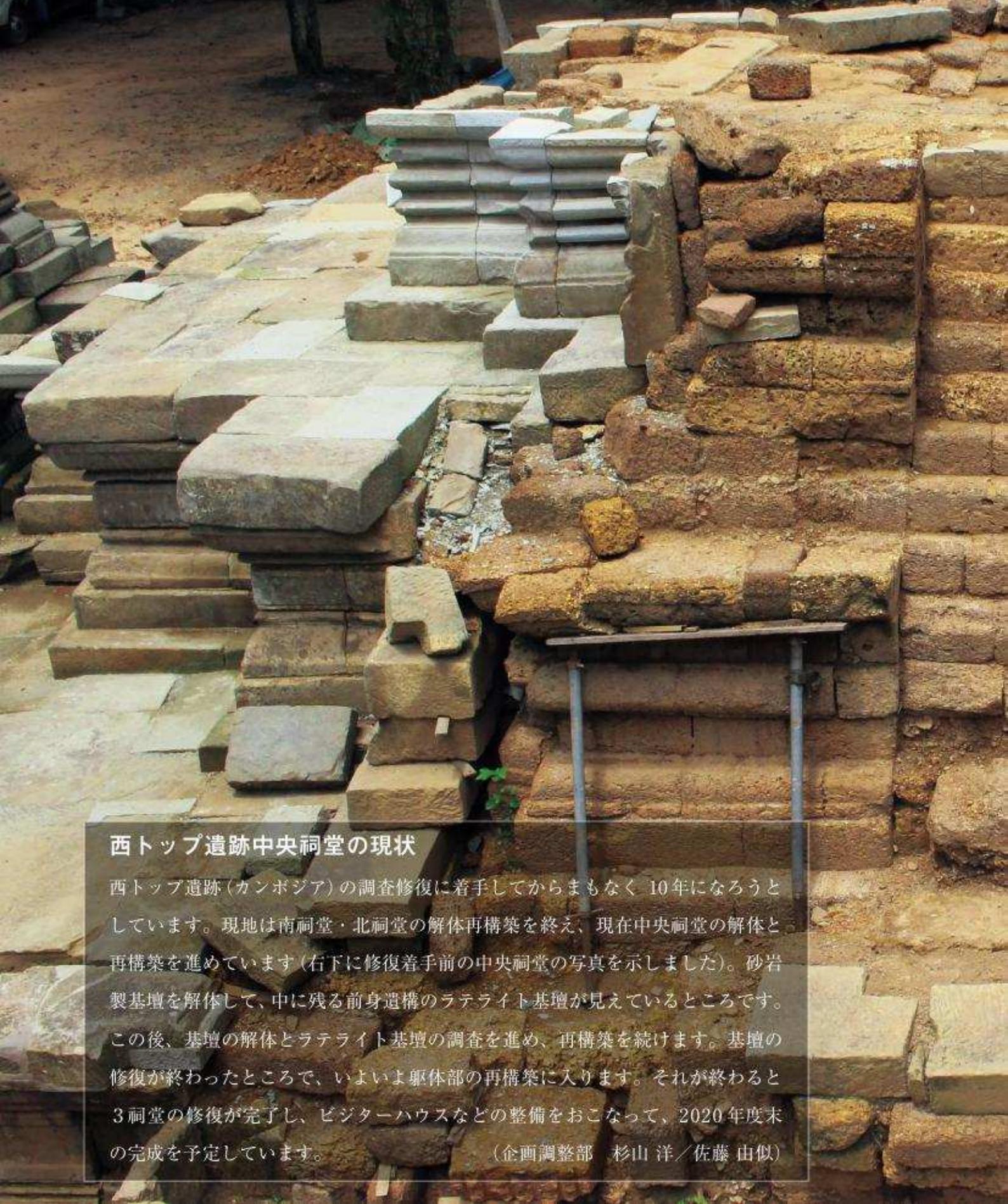
今回の調査では、奈良時代の顯著な遺構は確認できませんでした。これまでの調査でも遺構の密度は低く、第一次大極殿院や称徳天皇の西宮の東側は、奈良時代を通じて空閑地として保たれ続けた可能性が高いとみられます。

6月7日には、現地説明会を開催しました。雨の降りしきる中、また平日にもかかわらず、180名の方にお越しいただきました。

第一次大極殿院地区の発掘調査はこれで一段落となります。今後の調査の進展に、どうぞご期待ください。
(都城発掘調査部 桑田 訓也)



現地説明会の様子



西トップ遺跡中央祠堂の現状

西トップ遺跡(カンボジア)の調査修復に着手してからまもなく10年になろうとしています。現地は南祠堂・北祠堂の解体再構築を終え、現在中央祠堂の解体と再構築を進めています(右下に修復着手前の中央祠堂の写真を示しました)。砂岩製基壇を解体して、中に残る前身遺構のラテライト基壇が見えているところです。この後、基壇の解体とラテライト基壇の調査を進め、再構築を続けます。基壇の修復が終わったところで、いよいよ軀体部の再構築に入ります。それが終わると3祠堂の修復が完了し、ビジターハウスなどの整備をおこなって、2020年度末の完成を予定しています。

(企画調整部 杉山 洋／佐藤 由似)



解体前の中央祠堂

日韓発掘調査交流に参加して

2019年5月15日から6月30日まで、日韓発掘調査交流事業により、韓国の国立慶州文化財研究所に滞在し、発掘調査に参加しました。この事業は2005年より始まり、今年で15年目を迎えます。

今回私は、世界文化遺産「慶州歴史地域」の構成要素である、月城地区の核子と呼ばれる濠状遺構の西端、1号核子の調査と、同じく世界文化遺産の構成要素である、皇龍寺址の調査に参加しました。これまで日本からの研究員は秋から冬の季節に参加することが多かったのですが、今回は春の参加となりました。この季節の慶州は様々な花が咲き誇り、また、大変過ごしやすい気温で、非常に快適な滞在生活を送ることができました。まさにベストシーズンと呼ぶべき季節です。

1号核子の調査ではトレント（試掘溝）の壁の詳細な土層観察から、核子の構造や変遷について、また、皇龍寺址では高麗時代の礎石等の遺構を保存しつつ、その下層に存在する統一新羅時代や三国時代の遺構について検討するため、隙間を縫って設定されたトレントから得られるわずかな痕跡について、現場の研究員の方々と熱く議論することができました。拙い語学力でしたが、時に辞書を引き、時にスケッチを描く等して意思疎通に努め、韓国の研究者の方々もそれに忍耐強く付き合ってくださったことで大変有意義な議論をすることができました。

ほかにも、滞在中には瓦の調査や、山の中に数多く存在する仏教遺跡の踏査も実施し、その際にも多くの韓国の研究者の方々に大変お世話になりました。この場を借りてあらためて御礼申し上げたいと思います。秋には韓国の研究員が来日する予定です。この発掘調査交流がさらに発展することを願っています。

（都城発掘調査部 清野 陽一）



皇龍寺址での発掘調査風景（中央が筆者）

平城第612次・第613次発掘調査 現場から発見された地震痕跡

近年、平城や藤原の宮・京跡の発掘調査にともなって、あちらこちらで過去の地震痕跡が発見されています。その多くは、震度5弱以上の巨大地震によって起きやすいとされる「液状化現象」の痕跡でした。

そのような中、新たに平城宮第一次大極殿院地区（平城第612次調査）や法華寺阿弥陀浄土院隣接地（平城第613次調査）において、過去の巨大地震の痕跡が発見されました。今回の発見には、注目すべき点が2つあります。1つ目は、地震によって液状化し地面を貫いて噴き出した砂（=噴砂）が、高さ80cmほどの大きな丘状の地形（=噴丘）をつくり、周辺に流れ出していく痕跡です。平城第612次調査の宮造営以前の地層から検出されました。その様相は、まさに現代で発生する液状化現象と同様で、発掘調査をする際に地層の中で地震の痕跡がどのように見えるのかという好事例の一つとなります。2つ目は、平城第613次調査から見つかりました。奈良時代の地層を貫いた砂が、遺構の上を覆い、その砂の上の地層からは平安時代のものと推定される土器片が出土しました。これは地震の発生時期が推定される痕跡で、史料を紐解くと、天平17（745）年、天平宝字6（762）年、天長4（827）年、承和8（841）年、齊衡2（855）年に近畿圏が地震によって被災したことが記録されています。実際の地震はこれだけではないかもしれません。しかしこのように、地域の被災履歴を丁寧に読み取ることによって、地域防災・減災に役立てていきたいと考えています。（埋蔵文化財センター 村田 泰輔）



平城第613次調査で発見された地震痕跡

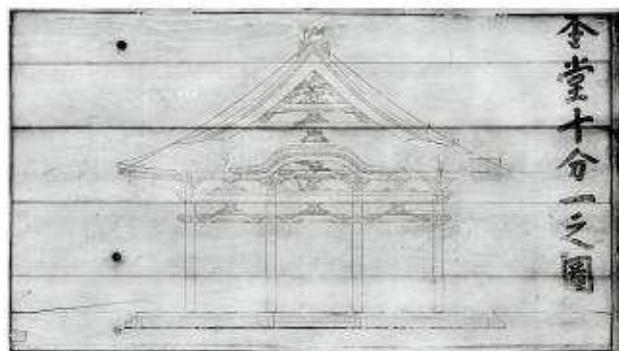
岡寺本堂建地割図の調査

奈良県高市郡明日香村岡に所在する岡寺（龍蓋寺）は、7世紀前半に創立したと伝える古刹です。文化2年（1805）上棟の本堂は、桁行5間、梁間3間、入母屋造、妻入の建物で、本尊は如意輪観音坐像（重要文化財）です。本尊の東西には脇侍像を安置する脇内陣と呼ばれる中二階の小部屋があります。2017年、この脇侍像を修理のため運び出したところ、東西両脇内陣の背面壁板にそれぞれ違う建物の建地割図（立面図と断面図をあわせて描いた図面）が描かれていることがわかり、奈文研が建築的調査をおこないました。

脇内陣は奥行が狭く、また一部の墨書が不鮮明であったため、まず中判デジタルカメラを用いて赤外線分割撮影をおこない、鮮明化した画像を用いて三次元解析をした後、解析成果からオルソ（正射投影）画像を出力しました。

作成した画像を調査した結果、東脇内陣建地割図は、現在の本堂とほぼ同じ建物が描かれており、本堂再建時に描かれた設計図であることがわかりました。西脇内陣建地割図は、該当する建物は岡寺境内にはありませんが、現本堂再建に関わった大工である、細田嘉七郎・豊田彦五郎・的場惣八の名が記されていました。また、岡寺の本寺である長谷寺本堂（慶安3年＝1650建立）と建築形式が似ていることから、長谷寺本堂などを参考に描かれた岡寺本堂の設計図のひとつと考えられます。

2枚の板図は脇内陣という重要な場所におさめられており、岡寺としても大切に扱われていたことがわかります。保存状態も良く、板図としても年代があきらかな新資料です。本堂の建築経緯を示す資料として大変貴重であり、棟札とともに永く保存されることが期待されます。（都城発掘調査部 大林潤）



岡寺本堂東脇内陣建地割図（赤外線オルソ画像）

高松塚古墳

解体実験用石室の公開

飛鳥資料館の庭園に、高松塚古墳の石室の実物大複製が登場しました。この石室は、平成18年から翌年に実施された高松塚古墳の石室解体作業のために製作されたものです。石材をつり上げる装置の開発や、作業のシミュレーションのために、京都府加茂町の実験場で使用された解体実験用の石室です。

実験用石室は実物と同じ16石で構成されています。石室内寸は実物にあわせていますが、外形は盗掘孔のある南面だけ見えていた状態で全体を推定して製作したため、寸法や形状が実際と異なる部分がありました。そこで、実物の情報をもとに梃子穴や相欠といった特徴や、予想外の形だった一番北の天井石を補足し、できるだけ実物に近い形状に整えました。実物の石材は二上山産の凝灰岩ですが、現在は入手困難なため、福島県産の凝灰岩（白河石）を使用しています。

実験用石室は石室解体事業が終了した後、飛鳥資料館で保管していました。その活用がながらく課題でしたが、石工の左野勝司氏の協力を得て、石材の加工と組み立てをおこない工事も完了し、公開することができました。

石室解体の現場では石室周辺に最低限の空間しかなかったので、石室の全貌を見通して眺めることはできませんでした。今回の展示によって、はじめて床石から天井石まで全体を見渡すことができるようになりました。

小さな古墳と言われることが多い高松塚古墳ですが、この石室で、実物大の迫力を体感してください。

（飛鳥資料館 石橋 茂登）



公開された解体実験用石室

飛鳥資料館 秋期特別展 「飛鳥-自然と人と-」

飛鳥の都で、人々は自然とどのように向き合ってきたのでしょうか？飛鳥では、山地と丘陵地が間近にせまり、平坦地は狭く、都の中心部を横切るように川が流れています。こうした自然環境は、その後の日本の都一たとえば奈良や京都とは、あきらかに異なります。けれども、そんな飛鳥の地にも、何度かの中斷をはさみながらも100年近く都がおかれていたのです。

そして、1300年が過ぎ去った今、飛鳥には人々が郷愁を感じる農村景観が広がります。山には木々が茂り、川には岩を縫うように清流が流れ、傾斜地には棚田が染かれ、その傍らには古代の遺跡が眠ります。

飛鳥時代から現代まで、飛鳥の人々は、この山や川の恵みを利用してきました。飛鳥の自然是、時代の流れと共に少しずつ姿を変えながらも、いつも人々の暮らしの側にありました。

今回の特別展では、飛鳥における自然と人との関わりを様々な角度から考えてみたいと思います。飛鳥時代の遺跡と人々の暮らしと自然が一体となった飛鳥の魅力を、飛鳥資料館写真コンテストに寄せられた写真と、文化財研究の成果を合わせてお楽しみください。（飛鳥資料館 西田 紀子）



会 期：10月11日（金）～12月1日（日）月曜休館、

※10月14日（月）11月4日（月）は開館、10月15日（火）11月5日（火）は休館

※10月22日（火・祝）、11月3日（日）は無料開館日

開館時間：9：00～16：30（入館は16：00まで）

ホームページ：<https://www.nabunken.go.jp/asuka/> お問合せ：☎ 0744-54-3561

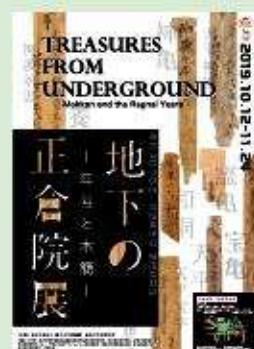
平城宮跡資料館 秋期特別展 「地下の正倉院展 -年号と木簡-」

平城宮跡資料館では、秋期特別展として恒例の「地下の正倉院展」を開催します。

本年は5月1日に天皇陛下が即位され、それとともに新しい元号「令和」が施行されました。典拝が漢籍ではなく、「万葉集」であったことも大きな話題となりました。そこで今年度は、年号が記された木簡をご覧いただく展示を企画しました。

年号は、西暦701年の「大宝」から「令和」まで、途切れることなく連続して使われており、奈良時代は年号の本格的な使用が始まって間もない時代といえます。年号の使用は、中国の思想や制度にもとづくもので、当時の改元は、めでたい亀や雲といった具体的なモノやコトを契機として、天皇の代始め以外でもおこなわれました。

木簡を通じて、奈良時代の年号に親しんでいただき、年号を書き記した当時の人々に思いをめぐらせていただければ幸いです。（都城発掘調査部 桑田 調也/企画調整部 藤田 友香里）



会 期：10月12日（土）～11月24日（日）月曜休館（月曜が祝日の場合は翌平日）

I期：10/12（土）～10/27（日） II期：10/29（火）～11/10（日） III期：11/12（火）～11/24（日）

開館時間：9：00～16：30（入館は16：00まで）

ギャラリートーク I期：10/18（金）、II期：11/1（金）、III期：11/15（金）各日14：30～

ホームページ：<https://www.nabunken.go.jp/heijo/museum/> お問合せ：☎ 0742-30-6753（連携推進課）

■ お知らせ

第11回東京講演会

2019年10月5日（土）10：00～16：00

於：有楽町朝日ホール

第125回公開講演会

2019年11月9日（土）13：00～16：00

於：平城宮跡資料館講堂

■ 記 錄

文化財担当者研修(専門研修)

○建造物保存活用基礎課程

2019年7月1日～7月5日 20名

飛鳥資料館 春期特別展

4月23日（火）～6月30日（日） 10,024名

「骨ものがたり—環境考古学研究室のお仕事」

平城宮跡資料館 夏のこども展示

7月20日（土）～9月1日（日） 9,162名

「ならのみやこのしょくぶつえん－土の中の花
鳥風月－」

飛鳥資料館 夏期企画展

7月19日（金）～9月1日（日） 3,070名

第10回写真コンテスト「飛鳥の古墳」

編集 「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <https://www.nabunken.go.jp>

Eメール jimur@nabunken.go.jp

発行年月 2019年9月